

お菓子の自伝的記憶における社会・文化的側面の検討

坪井 寿子

Study of the social and cultural aspects of autobiographical memory of confectionery

Hisako Tsuboi

要 旨

本研究では、お菓子の自伝的記憶における社会・文化的側面について検討を行った。まず、自伝的記憶について懐かしさや時間的展望との関連も含めてその特徴を述べた。その後、お菓子の自伝的記憶について、1)昔ながらの慣れ親しんでいるお菓子について懐かしさの概念から、2)食生活におけるお菓子を食べる出来事について時間的展望の概念から検討した。最後にまとめとして、お菓子に関する自伝的記憶の意義及びお菓子の社会・文化的側面について考察した。

キーワード：自伝的記憶、お菓子、社会・文化的側面

1. はじめに

本研究では、お菓子の自伝的記憶 (autobiographical memory) における社会・文化的側面からの検討を行う。自伝的記憶とは「現在にも影響を及ぼすような過去の出来事の記憶」の意とされている記憶心理学の概念である (佐藤 2008a)。一方、私たちにとってお菓子は身近な存在で幼少時の懐かしい思い出にもなっている。

筆者はこれまでお菓子の自伝的記憶についていくつか検討してきた。まず、お菓子の感覚知覚的特性を中心に全般的に検討し、お菓子に関する印象的なエピソードにはさまざまなものがあることや、お菓子に関する過去のエピソードが現在のお菓子に対するかわりに影響をもたらすことを示した (坪井 2014)。さらに、特定のお菓子を代表的な事例として挙げて詳しく検討したところ遊びなどの活動が伴った出来事の場合に強く印象に残ることが示された (坪井 2015)。他方、お菓子とのかかわりに関

する出来事について誰と食べた状況なのかについて検討したところ広く子どもの食生活の問題から検討していくことの必要性が示された (坪井 2016)。

このようにお菓子の自伝的記憶に関するいくつかの知見が示されたが、次のような課題もある。まず、お菓子が身近なものであることは理解できても自伝的記憶としての意義をより明確にしていくことが求められる。他方、お菓子が身近なものであるがゆえに社会・文化的側面からの検討も必要となってくる。そこで本論文では、より広い観点から社会・文化的側面について検討するために、懐かしさ及び時間的展望の概念を用いていく。具体的には、お菓子の自伝的記憶について、1)昔ながらの慣れ親しんでいるお菓子について懐かしさの概念から、2)食生活におけるお菓子を食べる出来事について時間的展望の概念から、の2点について検討していくことにする。

2. 自伝的記憶について

(1) 自伝的記憶とは

具体的な検討に入る前に、自伝的記憶について簡単に述べる。自伝的記憶は、「過去の自己に関わる情報の記憶」と定義されたり（佐藤 2008a）、「自己が経験した出来事に関する記憶」として、自己理解の裏づけとなったり、意志決定を方向づけたり、他者との関係構築に関わるなど、さまざまな意味で自己を支えるものであると位置づけられている（佐藤 2011）。また、自伝的記憶の機能としては、自己機能、社会機能及び方向づけ機能（問題解決のような機能）の3つがあるとされている（佐藤 2008b）。この自伝的記憶の機能を基に「何のためにお菓子を食った出来事を思い出すのか」「お菓子を食った出来事を思い出すことにどのような意味があるのか」について考えていくことが求められる。

自伝的記憶については、「自己と記憶」の問題が根底にあるといえる。例えば、高橋・佐藤（2008）では、次のように述べられている。「…ジェームス（James：著者注）は、自己の連続性のもとにあるのは記憶であると考えた。つまり、どれほど自分が変わったと感じても、自己の同一性を感じることができるのは、小学校の修学旅行の思い出、初恋の思い出など、自分に関する記憶をいつどこでも想起できることにあるという。（原文では改行：著者注）「去年も昨日も今日も、私は他の誰でもない、私である。」——この確固たる感覚を支えるのが、自己の記憶である。」。このように、自伝的記憶は、単なる記憶の問題ではなく、深く自己と関わっているといえる。

また、自伝的記憶は過去と現在を行き来していると考えられるが、このような時間の流れを行き来している概念として「懐かしさ」や「時間的展望」などがある。自伝的記憶で取り上げられているテーマは幅広く、これら懐かしさや時間的展望と関連させたものもある。例えば、幼少の頃の出来事は懐かしさが反映されているものが多いが、これらには絵本（金敷・山本 2009、山本・金敷 2010）や玩具（富山 2013）に関する自伝的記憶の研究がある。また、

将来への動機づけも含めて取り上げられているものについては、過去－現在－未来の時間の流れから時間的展望が関連していると考えられ、これについてはスポーツ（速水 2001）や学習活動（速水 2000）に関する自伝的記憶の研究がある。次項では懐かしさと時間的展望について自伝的記憶との関係について述べる。

(2) 懐かしさと自伝的記憶

「懐かしさ」については普段の生活から用いられている概念であり、かつて慣れ親しんだ人や物事を思い出して、昔に戻ったような気持ちになるといった意で用いられる。類義の語として、ノスタルジアが挙げられるが、寂しさや悲哀がより強調されることが多い。ノスタルジアには、個人的ノスタルジアと歴史的ノスタルジアの2種類がある（牧野 2014）。前者の個人的ノスタルジアの場合には、自分の体験した記憶に基づく懐かしさということになる。楠見（2014）では、懐かしさの感情について検討しており、喜び・楽しさ・幸福感・満足などのポジティブ感情並びに喪失感・寂しさ・後悔などのネガティブ感情の双方があり、複合的な感情とされている。また、甘酸っぱさやほろ苦さといったものを感じる場合もある。懐かしさの感情が生じるためには、過去のある時期に数多く接した対象に対して一定期間の空白の時期を経て、再び（久し振りに）出現したときに生じるとされている。後者の歴史的ノスタルジアについては、自身は体験していなくても、かつての古き良き時代の情景として、懐かしさを感じることを指している。

このような懐かしさと自伝的記憶との関連を直接検討したものに瀧川・仲（2011）の研究がある。ここでは、大学生を対象に小学校及び中学校時代の懐かしい音楽を聴いた場合の自伝的記憶の想起について調べている。その結果、自伝的記憶が数年の幅を持つ人生の時期によって時間的に体制化されていることが示されている。音楽については、メロディが頭の中に浮かぶなど鮮明な懐かしさが独特の形で生じる。お菓子についてはどのような傾向が見られるのか、お菓子の特徴を踏まえて考えていく必要もで

てくる。

さらに実用的な分野として、懐かしさにおける記憶と感情の問題について広告やコマーシャルを用いたマーケティングの分野からも検討されている。実際、カレールーのような食べ物を用いた「レトロ商品」に関する懐かしさの研究もある（杉森 2014）。食べ物を対象としているので、より具体的にお菓子と比較検討できる。このように個人的ノスタルジアや歴史的ノスタルジアも含めて考えることが求められる。

このように自伝的記憶は過去と現在とのつながりに基づいているのに対し、懐かしさは一定の空白期間が存在している等の違いは見られるが、両者に関連があることが示されている。

(3) 時間的展望と自伝的記憶

「時間的展望 (time perspective)」とは、レヴィン (Lewin) の場の理論に基づくある時点における心理学的未来および過去に対する見解の総体とされ、自伝的記憶との関連も示されている（白井 2008、下島 2008）。人は、過去-現在-未来の時間の流れの中を自由に行き来できる存在といえる。すなわち、かなり以前のことで印象的なできごとについてはタイムスリップしたように鮮明に思い出し、未来の事柄に対して想像、予測、プランニングしたりして、過去-現在-未来の時間の流れを行き来している。そこで、過去、現在、未来の流れに沿って、自伝的記憶と時間的展望について比較する。

「過去」については、自伝的記憶は特定のエピソードに基づく事実が問題となるが、時間的展望では過去を全体として取り上げ事実かどうかはあまり問題にしない。また、「現在」については、自伝的記憶では想起時点を指すが、時間的展望では幅がある。さらに「未来」については、自伝的記憶では現在以降のすべてを指すことが多く、時間的展望では目標が実現する時期を指している。

このような違いとともに、自伝的記憶では過去を重視し、時間的展望では未来を重視している傾向がある。その一方で、時間的展望でも過去をとらえた上で未来の展望を取り上げており、自伝的記憶も主

に動機づけの観点から未来を取り上げていることもあるなど、両者とも「過去-現在-未来」と時間の流れの枠組みでとらえられるという共通点がある。お菓子に関しても過去の出来事が、現在や将来において自身や子ども達のお菓子への関わり方についての考えや行動に影響をもたらすなど、時間の流れから検討することができる。これらのことを踏まえて冒頭の項で挙げた検討課題について取り上げる。

3. お菓子の自伝的記憶における懐かしさの検討

まず、昔ながらの慣れ親しんでいるお菓子の自伝的記憶について検討する。

(1) お菓子の内容に関する自伝的記憶

お菓子を含むより広い概念である食べ物などの味覚に関する自伝的記憶については、山本・野村 (2010) では食べ物の匂いからの感情喚起が自伝的記憶の想起に影響を及ぼすなど、感覚知覚的特性について検討している（さらに、山本 (2015) では嗅覚の自伝的記憶について自己-記憶システムに基づいた自伝的記憶のモデルを紹介している）。前述の感覚知覚的特性の面から検討したお菓子の自伝的記憶に関する研究では、お菓子ではあるが味覚以外の視覚や触覚などの感覚モダリティの影響もみられたことが示された（坪井 2014）。またお菓子の種類としては、「ねるねるねるね」や「うまい棒」に関するエピソードが多く、また記述も鮮明であった。

そこで、「ねるねるねるね」と「うまい棒」に限定して詳しく検討した（坪井 2015）。「ねるねるねるね」については、砂糖を主成分とした粉に水を加えて「ねるねる」を作り、キャンディチップやチョコクランチを付けて食べるお菓子である。子ども達が自分で自らお菓子を「作る」新鮮さや作る過程で「ねるねるねるね」の色が変わる点などが子どもにとって人気の原因となっている。一方、「うまい棒」については、棒状のスナック菓子であり、コンポータージュ味、明太子味、なっとう味など種類が豊富である。また、値段も安価なことから子どもや若者に人気のある駄菓子である（うまい棒同盟 2013、チームうまい棒

2014)。

これらのお菓子に関するエピソードが多かった理由については、「ねるねるねるね」では、甘いや可愛いなどの感覚知覚的特性とともに練って遊ぶといった動作が伴うことも印象に残ると考えられ、「うまい棒」では友達と遊んでいる時に食べたなど、遊び場面と関連したエピソードもみられた。双方のお菓子の共通点として何らかの形で活動が伴っている場合に印象に残っている。このことからお菓子は単なる食べ物に留まらない多面的な役割を有しているといえる。その一方で、このような「食べる」以外の「作って遊ぶ」ことの魅力は「ねるねるねるね」でより顕著にみられ、味覚特性によるおいしさは「うまい棒」の方が高く評定されたなど、それぞれの特徴がみられた。

(2) お菓子の中での駄菓子の位置づけ

このように「ねるねるねるね」や「うまい棒」などの駄菓子は子どもにとって印象的なお菓子であることが示された。そこで、子どもの駄菓子へのかかわりについて簡単に述べる。駄菓子は子どもにとって独特の魅力がある（例えば、松田・矢部 2003、松田 2002）。また駄菓子は安価であるため、子ども自身が小遣いの範囲で選んで買うことができるという特徴もある。

このことは、かなり以前の明治の時代からみられた（加藤 2000）。ただ、当時は小遣いをもらうこと自体に抵抗もみられ、むしろ経済的裕福な家庭の子どもがもらえず、日中子どもの世話ができないような家庭において夕方まで子どもだけで過ごすために小遣いが与えられ駄菓子を買っていた状況が見られた。余裕のある裕福な家庭が小遣いで駄菓子を買うことに対して敬遠していた背景には当時の衛生事情も影響していた。裕福な家庭の子どもが小遣いで駄菓子を買っている子どもを羨ましく思うこともみられたようである。

比較的細々と営まれていた駄菓子屋であったが、全盛期といえるものを迎えたのは1950年代とされている。ただ、駄菓子は他の商品とともに売られていたことも多く、果たしてどの店舗が実際に駄菓子屋

なのかははっきりしていなかったようである。買い手である子どもが駄菓子屋と認めても当の店主は駄菓子屋ととらえていなかったこともみられたようである。このように大人とは違った子ども独自のとらえ方があったことが、むしろ駄菓子が子どもにとって人気があった原因の1つかもしれない。

(3) お菓子の懐かしさにおける社会・文化的側面

このように駄菓子などのお菓子からは懐かしさやノスタルジアが生じることも多く、レトロ・マーケティングを活用した商品になることも少なくない（杉森 2014）。

例えば、子どもが実際に駄菓子屋でお菓子を買おうとしている場面では次のようなこともみられる。最初は、欲しいと思っていないものでも、「懐かしいな」と感じ、それが引き金となって「これが欲しい!」という気持ちが生じる。さらに「もう一度あの頃のような気持ちを味わってみよう」と思い、そこで懐かしいという感情が働くことが生じることある。さらに場合によっては「今を抜け出してあの頃に帰りたい（戻りたい）」や「あの頃は楽しかったがそれと比べて今は……」などと今の状況から逃避して現実逃避に近い気持ちから商品を買うこともあるかもしれない。この点ではむしろノスタルジアの気持ちの方がよりあてはまる。いずれにせよ、「もう一度あの頃に……」ということで具体的なエピソードを伴っている点で、自伝的記憶の問題となっている。

このように駄菓子をはじめとする懐かしいお菓子はレトロ・マーケティングにおける主要分野の1つとされ、前述の個人的ノスタルジアのみでなく歴史的なノスタルジアに基づいているお菓子のレトロ商品が実際に店頭に並べられている。

4. お菓子の自伝的記憶における時間的展望の検討

次に、2つめの検討課題として食生活の問題からお菓子を食べる出来事の自伝的記憶について述べる。

(1) お菓子を食べた出来事に関する自伝的記憶

お菓子にまつわる印象的なできごとには、遊びな

がらお菓子を食べたことが印象に残っていることが示された(坪井 2014, 2015)。実際、お菓子にまつわる出来事としては、遊びやイベントなど様々な人と関わっている状況が少なくない。そこで坪井(2016)ではお菓子の自伝的記憶について対人的な状況について検討した。具体的には「1人でお菓子を食べた」場合と「誰かとお菓子を食べた」場合について、最も印象に残るエピソード及び感情状態を調べた。感情状態については、そのエピソード時の感情状態をいくつかの感情語で評定してもらった。その結果、「誰かと食べた出来事」の方が、鮮明度や重要度、頻度の印象評定が高い結果となった。また感情に関する評定では、「1人で食べた出来事」の場合では「抑鬱・不安因子(くよくよした、気がかり等)」「倦怠因子(だるい、退屈な等)」「集中因子(注意深い、慎重な等)」「驚愕因子(動揺した、びっくりした等)」に関する感情評定が高く、「誰かと食べた出来事」の場合では「活動的快因子(活気のある、陽気な等)」「親和因子(好きな、いとおしい等)」が高い結果となったことが示された。このように感情については、「誰かとお菓子を食べた」出来事の方がより強く印象に残り、ポジティブな感情も強かったといえる。その一方で、周囲に人はいたが1人でお菓子を食べたといった場面は殆ど見られず、周囲の状況も含めてとらえることが必要となる。

(2) 食生活の問題の中でのお菓子の位置づけ

ところでお菓子を食べるということは、食べ物として体内に取り込むので、食の問題にもなる。「食」の問題については、「子どもと食」の著書(根ヶ山・外山・河崎 2013)でさまざまな分野から論じられおり、「子どもの食発達は、心理学、栄養学、小児科学、看護学、社会学、保育学、調理学、動物学、人類学、教育学などさまざまな領域が関わるきわめて学際的・人間科学的なテーマである。」との指摘がなされている。また、食には生物学的な側面と社会的な側面の両方とも重要であると指摘されている。

このような食の問題について、食事の自伝的記憶の研究もあり(飯塚・松川 2008、飯塚 2009)、食事中の会話など社会的な出来事という側面から具

体的に検討されている。さらに、1人で食べたのかもしくは誰かと食べたのかについては飯野(2014、2015)による自伝的記憶の研究もあり、個食の問題も含めて議論されている。

子どもの食生活については、食事が中心となるが、間食やおやつとして提供されるお菓子も子どもの食にもたらす影響は大きい。例えば、最近のお菓子の栄養面での問題が指摘されたり(食べ物文化編集部 2004)、お菓子を食べるのは「おやつ」の時が一般的であるが、最近ではお菓子を食事場面でも食べることも少なくない。

また、お菓子を1人で食べることについては、食事を1人で食べるといういわゆる個食の問題ほどには深刻ではないが、感情面からもいくつか影響がみられる。例えば、誰かとお菓子を食べる出来事は楽しいことが確かに多いが、時には他者とのいざこざや葛藤が生じることも少なくない。ただ、そこにはさまざまなコミュニケーションのやりとりが生じており、そこから得るものも多い。また、1人でお菓子を食べることは寂しさの気持ちから適量を超えたお菓子を食べてしまうきっかけとなることもある。お菓子そのものは決して悪いものではないが、適量を超えることは食生活全般に影響し、時には身体の状態に好ましくない影響をもたらす。

(3) お菓子の時間的展望における社会・文化的側面

お菓子へのかかわりとしては、体内に取り込むものなので、特に幼少の時期には周囲の大人が見守り導いていくことが必要となる。このように考えると、誰とどのような状況でお菓子を食べたのが問題となる。お菓子の自伝的記憶に関する研究でも過去のお菓子に関するエピソードが現在(もしくは未来)のお菓子への考えに影響を及ぼすことが示されている。そのためお菓子にまつわる経験についてある程度長期的にとらえるために時間的展望から考えていくことは有用といえる。

このようにお菓子を過去-現在-未来の時間の流れからとらえると単なる食べ物以上の役割・意義があるのではないかと考えることができる。お菓子の意義を示す例として、次のようなホームページ資料

が挙げられる。「森永製菓の菓子育 ～お菓子を通した心のふれあい～」において、お菓子は子どもの頃の思い出を中心に単なる食べ物以上の意味づけがあることが示されており、「おいしく」「たのしく」「すこやかに」のキャッチフレーズとともに、お菓子の役割として「お菓子で栄養補給」「お菓子は人の心を和やかにする」「お菓子は心の演出家」の3点が紹介され、お菓子の役割・意義について分かりやすく紹介されている（㈱森永製菓 ホームページ資料 2013現在）。この資料からすると、お菓子を食べるという出来事がある時で終わるものではないことが読み取れる。

5. まとめ

これまで述べてきたことを踏まえ、自伝的記憶の意義、社会・文化的側面の検討の2点について考察する。

(1) お菓子に関する自伝的記憶の意義からの検討

お菓子を食べた出来事の記憶を思い出すことによつてどのような意味があるのかについて、先に紹介した自伝的記憶の機能（自己機能、社会機能、方向づけ機能）の面から考える。

まず、自己機能については、自伝的記憶が自己の連続性や一貫性を支えたり、望ましい自己像を維持するのに役立つという機能を指している。お菓子は非常に身近なものであり、人生に大きな影響を与えることはあまりないかもしれないが、過去と現在の自分をつなげる連続性にはかかわってくるのではないかと考えられる。

2つめの社会機能については、自伝的記憶が対人関係やコミュニケーションにプラスの方向に影響を及ぼす機能を指している。本論で取り上げた誰かとお菓子を食べたエピソードは共有した他者と想起する場合もある。懐かしさを共有するだけでなく、実際に親密性も高くなる。

3つめの方向づけ機能については、自伝的記憶がさまざまな判断や行動を方向づけるのに役に立つという機能を指している。お菓子に関する個食や偏食などの食生活、さらには食の安全の問題も含めると

この方向づけ機能がかかわってくる。例えば、お菓子に関する過去のエピソードがお菓子に対する現在の考えに与える影響について、坪井（2014）では次のような記述がある。「飴をなめながら公園で遊んでいたら、喉につまらせて息が出来なかった、苦しくて死ぬかと思ったが、友だちに背中を叩いてもらって抜けたので大丈夫だった。」と過去のエピソードと述べた後に、「現代の子どもの食事法は知らないが、飴をのどに詰まらせて亡くなった子どももいると思うから、遊びながらお菓子を食べるのは止めた方がいいと伝えたい。」と、子どものお菓子への関わり方についての現在の考え方を述べている。このように時として、過去のエピソードが現在のお菓子に関する考えに大きな影響を及ぼしていることもある。

子どもの頃のお菓子にまつわる経験が、実際に成人した後どのような影響が見られるのだろうか。これには2通り考えられ、1つは身近な大人としてのかかわり方であり、父親・母親、親戚や地域の大人などである。これらの人々は、子どものお菓子への関わりについて普段から関与しているといえる。もう1つは、それを職業としている立場でのかかわり方であり、保育教育職や製菓関連職などである。特に後者の職業としてかかわる場合には、自身の個人的な経験に頼りすぎることは充分自省していかなくてはならない。しかし、実際には自身の印象的な出来事は生の経験としての影響力がかなり大きいといえる。両者の兼ね合いをバランスよくとっていくことが求められる。

(2) お菓子の社会・文化的側面からの検討

これまでお菓子の自伝的記憶について、駄菓子と懐かしさ、食生活の問題と時間的展望との2つの側面から検討してきたが、これらに共通していえることは社会・文化的側面が関係していることである。そこでお菓子の自伝的記憶に関する問題として両者を融合させて考えてみることにする。社会・文化的側面からのお菓子の自伝的記憶の検討として、ここでは「和菓子」を用いて考える。

和菓子は伝統的な昔ながらのお菓子とされており、まんじゅう、だんご、もち菓子、せんべい、あ

んこ菓子、寒天、あめ、南蛮菓子などがある。また、和菓子は季節ごとにたくさんの種類がある。季節の行事に合わせたものや、自然や風物をかたどったものもある。目で見てきれい、食べておいしい、昔から季節を大事にしてきた日本ならではの和菓子であるといえる。さらに和菓子はおやつとして食べるだけでなく、儀式や行事にも使われることも少なくない(藪 2015)。また、絵本として子どもに分かりやすく和菓子の魅力が紹介されている絵本もある(平野 2010)。このような和菓子は素材も含めて歴史・文化の面で蓄積があるので、その栄養面でも優れているといえる。他方、先に取り上げた駄菓子はその背景事情もあり、栄養的には十分に配慮されていない状況もあるが、友達との遊びが伴った懐かしい経験もある。このように、お菓子にまつわる楽しいエピソードを保ちつつ、栄養その他の食の問題とも両立させながら、子どものお菓子にまつわる豊かな経験を蓄積していくことの大切さについて考えていくことも必要になってこよう。

このような和菓子は、懐かしさの感情が生じるが、子どもの食へのかかわりということからも考えることができる。最近ではこのような和菓子を保育場面に取り入れる試みもなされている(たとえば、水野・山内(2000))。これらの取り組みでは、子どものお菓子をつくって喜ぶ姿や食べて喜んでいる姿が紹介されている。このような経験が、それぞれの子ども達の自伝的記憶としてどのような形で保持され、後になって想起されるのだろうか、さらにはどのように懐かしさを感じ、お菓子に対する考えやかかわりを深めていくのだろうか、といったことがお菓子の自伝的記憶の意義にかかわることにもなり今後の課題となる。併せて、本論文では、お菓子の社会・文化的側面を含めより広い観点から検討してきたが、今後は自伝的記憶の諸理論やメカニズムからより精緻に議論していくことも求められる。

6. 文献

速水敏彦(2001). スポーツの自伝的記憶と動機づけ
スポーツ心理学研究 28 21-30.

- 速水敏彦 安藤史高(2000). 英語学習の自伝的記憶と動機づけ学習 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 47 317-323.
- 平野恵理子(2010). 和菓子の絵本 和菓子っておいしい あすなろ書房
- 飯塚由美・松川順子(2008). 食の記憶の社会的背景Ⅰ - 印象に残る食事場面の記憶とイメージ評価 - 鳥根県立大学短期大学部研究紀要 46 35-43.
- 飯塚由美(2009). 食の記憶の社会的背景Ⅱ - 自伝的記憶にみる食事場面の状況分析と对人的要因 - 鳥根県立大学短期大学部研究紀要 47 1-8.
- 飯塚由美(2014). 「共食」と「一人食」における心理および行動パターンの分析Ⅰ テキストによる質的分析から 鳥根県立大学短期大学部研究紀要52 21-25.
- 飯塚由美(2015). 「共食」と「一人食」における心理および行動パターンの分析Ⅱ 食事評価とパーソナリティの観点から 鳥根県立大学短期大学部研究紀要 53 41-48.
- 金敷大之・山本晃輔(2009). 絵本の思い出—大学生における物語の自伝的記憶についてのプロトコル研究 畿央大学紀要10 11-20.
- 加藤理(2000). 駄菓子屋・読み物と子どもの近代 青弓社ライブラリー10 青弓社
- 楠見孝(2014). なつかしさの心理学 - 記憶と感情、その意義 楠見孝(編著) なつかしさの心理学 思い出と感情 第1章 誠信書房
- 牧野圭子(2014) 消費者行動研究からみたノスタルジア 楠見孝(編著) なつかしさの心理学 思い出と感情 第3章 誠信書房
- 松田道雄・矢部亨(2003). だがしや楽校のススめ 児童舎
- 松田道雄(2002). 駄菓子屋学校—小さな店の大きな話— 子どもがひらく未来学 新評論社
- 水野豊二 山内知子(2000). 子どもと作って食べよう園でのおやつ 明治図書
- 森永製菓(株) ホームページ資料(2013). 「森永製菓の菓子育」 http://www.morinaga.co.jp/food_education/index.html アクセス日時2013,9,223
- 根ヶ山光一 外山紀子 河原紀子(編)(2013). 子どもと食 - 食育を超える - 東京大学出版会
- 佐藤浩一(2008a). 自伝的記憶研究の方法と収束的妥当性 佐藤浩一・下島裕美・越智啓太(編) 自伝的記憶の心理学 第1章 北大路書房
- 佐藤浩一(2008b). 自伝的記憶の機能 佐藤浩一・下島裕美・越智啓太(編) 自伝的記憶の心理学 第5章

- 北大路書房
- 佐藤浩一 (2011). 自己と記憶 日本認知心理学会 (監修) 太田信夫・巖島行雄 (編) 記憶と日常 現代の認知心理学 第8章 北大路書房
- 清水寛之 (2011). 自伝的記憶の発達 子安増生 白井利明 (編) 発達科学ハンドブック3 時間と人間 第17章 新曜社
- 下島裕美 (2008). 自伝的記憶と時間的展望 心理学評論 51 特集「自己と記憶」8-19.
- 白井利明 (2008). 時間的展望と自伝的記憶 佐藤浩一・下島裕美・越智啓太 (編) 自伝的記憶の心理学 第11章 北大路書房
- 杉森絵里子 (2014). なつかしいものはどのように記憶に残るか 楠見孝 (編著) なつかしさの心理学 思い出と感情 第4章 誠信書房
- 食べ物文化編集部 (2004). コンビニおやつ-子どもは大好き! ちょっと心配? 芽ばえ社
- 高橋雅延・佐藤浩一 (2008). 「自己と記憶」の特集にあたって 心理学評論 51 特集: 自己と記憶 3-7.
- 瀧川真也 仲真紀子 (2011). 懐かしさ感情が自伝的記憶の想起に及ぼす影響: 反応時間を指標として 認知心理学研究 9 65-73.
- チームうまい棒 (2014). うまい棒は、なぜうまいのか? 日本実業出版社
- 富山舞 (2013). おもちゃを使用した遊びにおける自伝的記憶に関する研究 東京未来大学 2012年度卒業論文
- 都筑学 (2011). 時間的展望の発達 子安増生 白井利明 (編) 発達科学ハンドブック3 時間と人間 第18章 新曜社
- 坪井寿子 (2014). お菓子に関する自伝的記憶 - 感覚モダリティに関する検討 - 東京未来大学研究紀要, 7, 125-134.
- 坪井寿子 (2015). お菓子の自伝的記憶に関する代表的な事例を用いた検討 東京未来大学紀要 8 83-91.
- 坪井寿子 (2016). お菓子の自伝的記憶における対人的状況 - 感情からの検討 - 東京未来大学紀要 9 127-136.
- うまい棒同盟 (2013). やおきん公認 うまい棒大百科 河出書房新社
- 藪光生 (2015). 和菓子WAGASHI (ジャパノロジー・コレクション) 角川ソフィア文庫
- 山本晃輔 (2015). 嗅覚と自伝的記憶に関する研究の展望 - 想起過程の再考を中心として - 心理学評論, 58, 423-450.
- 山本晃輔・野村幸正 (2010). におい手がかりの命名、感情喚起度、および快-不快が自伝的記憶の想起に及ぼす影響 認知心理学研究, 7, 127-135.
- 山本晃輔・金敷大之 (2010). 絵本を手がかりとした幼少期における自伝的記憶の内容分析, 教育実践総合センター研究紀要, 19, 47-51.

(つばい ひさこ) 東京未来大学